

# 第4章

## 第一言語習得 ・ 第二言語習得

**第一言語**とは…

**母語** つまり生まれてから最初に習得した言語



**第二言語**とは…

- ① 母語の次に習得した言語
- ② 学習する言語が話されている国で、生活の手段として使う言語



### 第一言語習得

な能力 VS な能力

ノーム・チョムスキー (1928-)

言語学



by wikipedia

スキナー (1904-1990)

行動主義心理学



by wikipedia

## 第4章

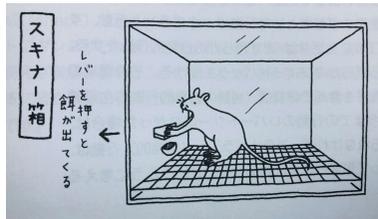
### (1) 第一言語習得理論



### 「習慣形成理論」 by スキナー (1957)

第一言語習得の過程

周囲からの ⇒ ⇒ ⇒



「新・初めての日本語教育」より抜粋

オペラント条件付け (道具的条件付け) の実験



by wikipedia

言語を獲得するのに重要なのは、刺激ではない。

だ。 VS スキナー

- ・ 子供が大人から受ける情報は、不十分で誤りを含んだもの
- ・ 子供が言い間違えても、常に訂正されるわけではない

⇒ by プラトン (古代ギリシャの哲学者)

では、なぜ子供は大人と同じ文法を習得できるのか？

### 「生成文法理論」 by チョムスキー (1957)

生まれながらにして人間の脳には

と が備わっている

Language Acquisition Device



- ・
- ・
- ・ 子供は設定を母語にすることで、母語のを獲得する

京都大学堂長研究助手チンパンジーアイ より



マイケル・トマセロ (1950-)

VS チョムスキー

言語習得は、**生得的な能力**ではない

子供は を通して言語を習得する



(2000)

「用法基盤モデル」 by トマセロ (2000)

- ① …大人が手や指で物を示し、  
子供の注意を向けさせる行為
- ② …大人の意図を理解する
- ③ …ことば(音)と意味を関連付け、  
規則性を見出す



第一言語の習得順序の研究 by ロジャー・ブラウン (1973)

子供は で第一言語を習得する  
(英語 現在進行形-ing ⇒ 複数形-s ⇒ 動詞の過去形…)



- ・ 「自然(習得)順序仮説」 by クラッシュェン
- ・ 「創造的構築仮説」 by デュレイとバート

< 第一言語習得理論と教授法 >

19c ( )

⇒ 幼児が母語を身に付ける過程を観察して生まれた

1950-60年代

⇒ 「**習慣形成理論**」(スキナー)の影響

1960年代

⇒ 「**生成文法理論**」(チョムスキー)の影響

1960年代~70年代



1980年代

⇒ 基盤となったモニターモデルの1つ

⇒ ブラウンの第一言語習得の影響

## 第4章

### (2) 臨界期仮説



#### 「臨界期仮説」 byレネバーグ (1967)

- ・人間には、がある  
それを過ぎると母語話者並みに言語を習得することが困難になる
- ・(諸説あり)

：もともと右脳と左脳の役割は決まっていない  
12歳頃から異なる機能をつかさどるようになる

## 第4章

### (3) 第二言語習得理論

#### < 習得順序 >



ブラウンの影響を受けて…

#### byクラッシュェン (1980年代)

※モニターモデル (第二言語習得に関する 5つの仮説) の1つ

- ・文法規則は、
- ・その自然な順序は、

**デュレイとバート**

ブラウンの影響を受け、第二言語学習者の習得順序を研究

⇒ **第一言語と似たような順序を発見**

第二言語の習得において、

- ・
- ・



by Paderborn University HP

**ピーネマン (1951-)**

ドイツ語の習得順序を研究

⇒

という順で

**(1998)**

① 言語習得には

(単純→複雑)

**「処理可能性理論」 (1998)**

② ある段階より を指導すると

習得を促すことができる



：学習者は、**段階を飛び越えて**習得することは**できない**

：教師は、学習者の段階を見極め、それに沿った指導をすることで**効率よく習得を促す**ことができる

※**習得**順序：

ex. **現在形**⇒**現在進行形**⇒**過去形**…

**発達**順序：

ex. **現在進行形**の否定⇒疑問⇒過去

## 第4章

### (3) 第二言語習得理論

< ノン・インターフェイス、  
インターフェイス >

#### モニターモデル(第二言語習得に関する5つの仮説)

##### ①習得－学習仮説

クラッシュェンは

「習得」⇒ 自然に無意識的に 言語を身に付けること

「学習」⇒ 意識的に言語を学ぶこと



25

ノン・インターフェイスの立場

(習得－学習仮説)

VS



学習した知識が無意識的、自動的に出てくるようになる

=

・学習して意識的に身に付けた知識 =

例) 外国語の文法・発音

・無意識的で直感的な知識 =

例) 母語の文法・発音



## 第4章

### (3) 第二言語習得理論

#### < インプット >



#### モニターモデル (第二言語習得に関する5つの仮説)

##### ④ インプット仮説

第二言語は を

大量に浴びることによって自然に習得できる



VS

スウェイン、ロング、シュミット

by University of Barcelona HP



メリル・スウェイン (1944-)

第二言語の習得には、インプットだけでは不十分  
が必要

⇒

アウトプット



(1985)



#### 「アウトプット仮説」 (1985)

アウトプットにより…

① 相手の反応 (= )を見て

確認できる

② のギャップに気づく

⇒ インプットに注意を向けるようになる

by University of Barcelona HP



**マイケル・ロング** (1945-2021)

学習者は を行う中で、  
 語や文法に注意が向き、「理解可能なインプット」が得られる

↓

**(1983)** 

**「インターアクション仮説」 (1983)**

- ① : 相手の発話が**不明確で理解できない時**、  
 もう一度**はっきり言うよう**要求 
- ② : 相手の発話を **自分が正しく理解できているか**
- ③ : 自分の発話を **相手が正しく理解したか**

**II) タスク中心の教授法 (TBLT) by マイケル・ロング**

1990年代

- ・オーディオリンガル・メソッドとコミュニカティブ・アプローチ、  
**両方の長所を兼ね備えた教授法**
- ・**タスク活動を行う過程での やりとり=意味交渉**を通して、  
**コミュニケーション能力を向上させる**
- ・**まず タスク(課題)を行い、必要に応じて、**  
**学習者の注意を言語形式に向けさせる**

34

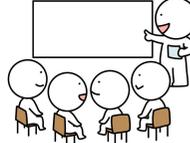
**II) タスク中心の教授法 (TBLT) by マイケル・ロング**

**コミュニケーション活動・意味重視** 

&

**必要に応じて、学生の注意を言語形式に向けさせる指導法**

↓

**フォーカス・オン・フォーム (Focus on Form)** 

35

by National Foreign Language Resource Center  
University of Hawai'i at Mānoa



**リチャード・シュミット(1941-2017)**

- ・学習者がインプットに含まれる言語形式に  
が必要
- ・インプットの中で、学習者が気づいて自分の中に  
**取り込んだもの** =

↓

**(1990)**



## 第4章

### (3) 第二言語習得理論

#### 誤用訂正



#### ～誤用訂正の例～

学生A「先生、昨日は 寒いでしたね。」

①「昨日は寒いでした。」 **違います**。「寒かったです。」

⇒



#### ～誤用訂正の例～

学生A「先生、昨日は 寒いでしたね。」

②「昨日は **寒かったです**ね。」

⇒ 間違いを

間違いに



～誤用訂正の例～

学生A「先生、昨日は 寒いでしたね。」

③「昨日は寒い“でした”？」(繰り返し)「昨日は 寒…?」(誘導)

「“寒い”は イ形容詞ですよ。」(メタ言語的修正)

「もう一度言ってください。」(明確化要求)



## 第4章

### (4) 誤用研究



#### <対照分析研究>

1950 - 60年代

学習者の \_\_\_\_\_ を研究

#### 【背景】

オーディオリンガル・メソッド (正確さ重視)

⇒



#### <対照分析研究>

：今まで身に付けた言語が、第二言語習得に  
影響を与えること

の転移：いい影響を与えること

の転移：悪い影響を与えること

▼ : 母語が悪い影響を与えること

**対照分析研究の問題点**

・母語と目標言語の違いから、色んな予測を立てて研究したが、  
**予測通りの結果にならないことが多かった**

・ ことがわかった



対照分析研究は衰退、**誤用を分析する研究**が始まった

**誤用の捉え方の変化**

**<対照分析研究>** 1950 - 60年代

学習者の誤用は



**<誤用分析研究 (byコーダー)>** 1960年代後半 - 70年代

学習者は誤用を産出しながら、自分の発話を修正していく  
 だから、

**<誤用分析研究> byコーダー**

：単なる言い間違い

本来は正しく使えるが、疲れや緊張から起こる誤り

( )

：学習者が繰り返し起こす誤り

( )

**<誤用分析研究> byコーダー**

**エラー**



・ **過剰(一)般化**

・ **簡略化**

<p>例① わたし、沖縄、んー、楽しいです。</p> <p>：</p> <p>コミュニケーションに</p> <p>誤り</p>
<p>例② わたしは去年沖縄へ行きます。楽しいでした。</p> <p>：</p> <p>コミュニケーション上、</p> <p>誤り</p>

<p>例① 中国人の学生の作文「きのう、わたしの生日でした。」</p> <p>アメリカ人の学生の発話「アンナはうれしかったです。」</p> <p>：</p> <p>による誤り</p>
<p>例② きのは寒いでした。 わたしは背が長いです。</p> <p>：</p> <p>学習者の</p> <p>目標言語の発達途上で起こる誤り</p>

<p><b>言語内エラー</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li> <p>：ある言語規則を適用できないところにまで適用してしまうこと</p> <p>例) きのは雨でした。寒いでした。</p> </li> <li> <p>：言語規則を簡略化してしまうこと</p> <p>例) 「トム、コンビニ。」</p> </li> </ul>
--

<p><b>誤用分析研究の問題点</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li> <p>(文法的には正しいが不自然な表現、など)</p> </li> <li> <p>により誤用が出ないことがある</p> </li> </ul> <div style="border: 1px solid black; border-radius: 15px; padding: 10px; margin: 10px 0;"> <p>間違いを最小限に留めようとする</p> </div> <p style="text-align: center;">↓</p> <p>誤用分析研究は衰退、 の研究が始まった</p>
--

学習者は文法的には正しいが、  
してしまうことがある

を

<原因>



<中間言語研究> byセリンカー

1970年代前半~80年代

誤用だけでなく、

中間言語:

母語でも第二言語でもない、その中間に位置する

(各学習者の現時点での第二言語の能力)

中間言語の特徴

- ・ 目標言語に近づいていく
- ・ 発達過程で がおこる

: 誤用が定着し、簡単には直らなくなってしまうこと

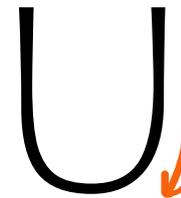
: 中間言語はU字型に発達する



中間言語の U字型発達

新しい項目を学ぶ

また正しく使えるようになる



を間違えるようになる